

種名	<u>オ オ ク チ バ ス</u> <u>Micropterus salmoides</u> 
分類	サンフィッシュ科オオクチバス属
俗称	ブラックバス、バス、オオクチクロマス
形態的な特徴	大きく見ればスズキの仲間なので、背鰭が第一背鰭と第二背鰭に分かれている。本種は名前の通り口が非常に大きく、動いている物に敏感に反応し何にでも食らいつく。体色は銀白色で体側に一本の黒色縦条が入るが大型種では不明瞭になる。
分布	原産国は北アメリカの外来種で、1925 年に神奈川県芦ノ湖へ移入されたのを初め、日本各地の湖沼にスポーツフィッシングのために移入された。
繁殖行動	産卵期は5～7月で、砂、砂利、あるいは礫質の湖底にオスが直径 50cm 深さ 15cm ほどの巣を作り、そこにメスを誘い込んで行う。湖底が泥地の場合は木の切り株や水草の茎が産卵床となることもある。稚魚は2～3cm までは親に保護されて育つが、このころから単独生活に入り魚食性が強くなる。
生息場所	止水域を好むため湖沼などがおもな生息域であるが、河川の下流域など流れの緩やかな水域にも生息する。ふだんは物陰に潜んでいることが多く、夏の天気の良い日などは岸辺から本種の群を確認することができる。また、春から秋は水面近くや水草の茂った岸近くまで来ることがあり、冬は藻や水中に沈んだ枝の影などに潜んでいる。
食性	本種は非常に大食漢で魚食性も強いので、本種が生息するため池には他の小魚が見られなくなることもしばしばある。
生息環境への配慮事項	日本各地に放流され、現在では地方の農業用の小さなため池にもブルーギルと共に生息しているほどで、水田脇の用水路でさえ本種の稚魚が確認されている。本種は水温が 15℃に達しないと繁殖を始めない。本来、日本に生息しているはずのない本種が在来種を食害し、琵琶湖などでも漁業に大きな影響を与えている。本種の強い魚食性と物影に好んで生息するという性質から、本来小魚類が多く生息しているはずの藻の茂みや物陰が本種のエサ場となり、小規模なため池などの閉鎖水域では本種しか生息しない水域となってしまう。しかし、岸辺の藻や木杭などは他の小魚にとっても重要な隠れ家であるため、改修時にコンクリート張りのすり鉢状のため池にしてしまうことは本種を益々増やしてしまうことに成りかねない。
引用文献： http://www.maff.go.jp/nouson/mizu_midori/menu/main.html を改変	